



豊かな自然環境を大切に 安全とおいしさを求めて

庄内協同ファームだより

2026年3月号 No.202

農事組合法人 庄内協同ファーム
〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338
TEL.0235-78-2120 FAX.0235-78-2140
<http://www.shonaifarm.com>



あたりまえに いっぱいのごはんを 食べれる未来へ

2026年今年こそ温暖な
良い年でありますように

佐藤清夫



アメリカのトランプ大統領が「グリーンランドはアメリカの安全保障上必要である」といっている。時代が何百年も戻ってしまったような感じがして、世界中の人が驚きをもってこの報道をみているに違いない。ペリーが江戸にやってきて不平等条約を結んだ時とほとんど同じだ。トランプ大統領になるとあんなになつてしまふのか。ベネズエラの大統領を拉致したり、自分を「関税大統領」と言っているのと同じことを聞かない国には法外な関税をかけて喜んでみたり、それで本当にアメリカが豊かになるのだろうか。

日本の安全保障はアメリカの安全保障に大きく左右されてきた。日米同盟そのものがいびつな同盟ではないのか。トランプ大統領は「アメリカは日本を守る義務があるのに日本はアメリカを守らなくていい、じつに不公平だ」とトランプ大統領が言う通りまともな国同士の同盟ではない。防衛関連には突出してお金をかけるようになり、安倍政権以降特に大盤振る舞いになっている。日本政府の言う日米同盟とはアメリカ側がまだ言わない分もすべて飲みましようというところのようだ。日本政府は農家が40%もの転作をやりながら苦しんでいる中で、世界中から農産物を輸入している。日本の農家は何かを作った方がいいのか、米ももう作れなくなるかもしれない。と農家は心配しているのだが、農家の買入コメ価格が高くなれば当然のようにコメ離れが進み、そのすきを狙ってアメリカの米が入ってくる。何のために減反をしているのか、解ら

なくなってしまう。これが日本の農業政策である。アメリカの農業を助け日本の農業を潰す、正に日本政府の背任行為である。

冬季限定で佐藤清夫さんが栽培から製造までした赤かぶ漬物を販売しています!!



山形の

郷土料理紹介

早春号

「いとこ煮」

山形県庄内地方に伝わる「いとこ煮」は、小豆ともち米を一緒に炊き上げた、素朴でやさしい甘さが魅力の郷土料理です。小豆のほっくりとした風味と、もち米のもっちりとした食感が調和し、昔からお茶請けや行事食として親しまれてきました。家庭ごとに甘さや固さの加減が異なり、地域の暮らしや文化がそのまま味に表れるのも特徴です。炊きたてはもちろん、冷めても美味しく、世代を超えて愛され続けています。



(材料) 作りやすい量

- ・もち米 2合(300g)
- ・小豆 2合(300g)
- ・砂糖 300g
- ※もち米：小豆：砂糖=1：1：1
- ・塩 少々
- ・水(小豆をゆでる用) 900cc
- ・小豆のゆで汁 2カップ(400cc)



- レシピ
- ①もち米と小豆はそれぞれ水で洗い、一晚水に浸しておく。
 - ②小豆は最初強火で、沸騰したら弱火にして手でつぶせる硬さになるまで30分程度ゆで、ザルにあげる。ゆで汁は2カップ残す。
 - ③炊飯器に小豆を入れて平らにならし、その上に水を切ったもち米をのせて平らにする。
 - ④③に②の小豆のゆで汁を入れて炊く。
 - ⑤炊きあがったら、砂糖と塩を入れる。箸で所々に穴を開けて、ふたをしてもう一度炊く。
 - ⑥炊きあがったら全体を混ぜ合わせ、少し冷ましたら完成。



令和の百姓一揆・やまがたに
参加して

2025年3月に東京で開催された「令和の百姓一揆」。山形県でも夏に有志が集まり、「山形から農と食を未来へつなごう」をテーマに掲げ、2025年11月24日、山形市で「令和の百姓一揆・やまがた」が開催されました。庄内協同ファームとして参画し、また共同代表も務めました。

当日は、山形市の嶋遺跡公園周辺を、約140人の生産者や市民の皆さんと共に練り歩きました。トラクターを先頭に、旗やプラカードを掲げながら進む行進の公道では、立ち止まって応援してくださる方、手を振ってくださる方の笑顔がありました。その中で特に印象的だったのが子どもたちの笑顔でした。この子どもたちが安心して暮らせ



る世の中に、今誰かが動き、良い方向へ進めるきっかけをつくるのが、いかに大切かを改めて感じました。多くのメディアにも取り上げていただき、山形でも一石を投じることができたのではないかと思います。同日に行われたシンポジウムにも約270人が参加し、生産者と消費者によるトークセッションが行われました。価格のこと、労働のこと、暮らしのこと。普段は交わることの少ない立場同士が率直に話し合うことで、「知らなかった」「初めて聞いた」という声が多く聞かれました。第一歩として、今、農業が置かれている現実を市民をはじめとした多くの人と共有し、次のアクションに繋げるための場になったと思います。



は大きく、改めて「みんなの課題」であると感じています。だからこそ「危機感を共有し、アクションを起こすきっかけを誰かがやらなければならぬ」と思い、この運動に関わりました。完璧な答えはありませんが、動かなければ何も始まりません。現在、令和の百姓一揆の動きは全国各地に広がっており、2026年3月29日には再び東京での開催も予定されています。山形での私たちの一歩も、その流れの一部であり、これから積み重ねていくことが大切だと考えています。



『あたりまえに
いっばいのごはんを食べる未来へ』
今回の取り組みが、皆さん一人ひとりに
とっても「自分なりの関わり方」を考える
きっかけになれば幸いです。

ファームの活動記録

あいコープふくしま生協祭

文：佐藤 一交



11月30日、福島県郡山市のビッグパレットで開催された、あいコープふくしま生協祭に出店させていただきました。ブース総数60もの大きなお祭り、当日は晴天にも恵まれ、1,400名以上もの来場者数がありました。販売も好調で3時間の間、ひっきりなしに組合員の方々がいらっしゃいました。「いつもこの玄米餅を買っています」「本当に美味しいです」などの感想もいただき、ありがたい限りでした。他の生産者の皆さん、あいコープふくしまの組合員さん、職員の皆さんともお話しでき、対面での交流経験は本当に貴重だと感じました。販売には3人のサポーター支援があり、初めてのお話でしたが、終始朗らかに手伝っていただき、雰囲気の良いブース運営ができました。ありがとうございました。多くのお客様からメッセージカードも書いていただき、壁の模造紙に貼り出しました。一枚一枚が宝物だなと思いました。

よつ葉生協 ふれあいまつり

文：今野 紗代

今回、試食販売を行いました。大人気だった商品は玄米もちです。組合員さんでリピートしてくれる方もいれば、試食をして玄米特有の癖のなさに驚いて購入してくれる方もいました。組合員の方からは「すでにチラシで注文した」「よもぎもちの復活を楽しみにしていた」とのお声もいただき、改めて自社の商品が消費者の方に愛されていると実感しました。

毎年お声がけいただき、参加させていただいているよつ葉生協様のふれあいまつり。次回もたくさんの組合員の方とお会いできるのを楽しみにしております。ありがとうございました。



11月15日、栃木県宇都宮駅付近にあるライトキューブ宇都宮で、よつ葉生協主催のふれあいまつりが開催されました。例年は、栃木県の小山市総合公園を使用しておりましたが、場所を変えて規模を大きくした開催となりました。

パルシステム生産者・消費者協議会
「2025年度 青年農業者交流会」

文：忠鉢 徳弘



11月12日、福島県でパルシステム生産者・消費者協議会主催の「青年農業者交流会」が開催されました。無茶々園の代表取締役 大津清次氏による「生消協の歴史と農業・地域づくり」の講演では、これまでの歩みと未来への展望について熱いメッセージをいただきました。その後のグループトークでは「5年後、10年後の夢」をテーマに、次世代へ継承できるファームづくりや農業以外の多角化戦略、地域一体型の生産、消費者にもっとわかりやすいカタログや新作物の提案など、活発な意見が飛び交いました。

翌13日はジェイラップを視察。代表取締役 伊藤大輔氏の案内で最新施設や新事業を見学し、特に「希望の里山100年プロジェクト」には大きな感銘を受けました。孫世代まで見据えた壮大な計画に、参加者一同未来への期待を膨らませました。

アイチョイス×コープ自然派
生産者消費者討論会

文：小野寺 紀允

1月21日、アイチョイス×コープ自然派による生産者消費者討論会「わたしたちの産直—これからの10年を語り合う—」が開催されました。コープ自然派兵庫の正橋理事長をファシリテーターに、東京大学大学院特任教授の鈴木宣弘先生、くまもと有機の会専務の田中誠さん、私、小野寺にてトークセッションが行われました。前段では鈴木先生より、農水省予算の低さや、国を含めた仕組みづくり、食の安全保障の必要性が語られました。熊本で進む有機の学校の取り組みや共同利用、協同組織の仕組みは、新たな担い手の入り口として重要であると感じました。消費者の思いと共に、学校給食や地域流通、産直の役割が重要であると討論となりました。その後のグループトークでも消費者・生産者と共に「産直」の豊かな未来の可能性を深められ、これからのアクションのヒントになりました。

